

第14回 蘇東坡は都から去り行く人を幾人となく見送った

——美なる哉かな 河水むな 空しく洋洋ようようたり

2018年2月13日（火）。

「こないだ、映画と一緒に見に行かない？って誘ってみたんだけど、断られちゃったんだ。残念だったなあ。それで仕方なく1人で行ったんだけどさ」

「ほう、もしかして、それって失恋っぽく聞こえなくもないですけど。だとしたら、ちよつとした事件ではありませんか」

「残念でした。そういう期待には基本的に応えられません。誘った相手にしても、この世の人かどうかもよくわかんないわけだし……」

「ん？ あっちの世界の人？ 妖怪？ 半魚人？ ああ、ひよつとして、トーバ
ー君ですか？」

「そうそう。でも、映画館のような密閉された空間がダメなんだって。息が詰ま
って死んじゃうかもって。もともと900年以上も前に死んでるのに、なんかお
かしなことをいうよね」

「仙人というのは自在に空を飛ぶ一方で、閉所恐怖症だったりするのでしょうか」

「トーバー君がよくいう『気』というものがふさがれてしまうのがいやみたい。

それで思ったんだけど、いつもの炭火焼の店は1年中扉が開けっ放しなんだよね。
炭火をがんがん焚いて、それこそ息が詰まって、お客さんがみんな死んじゃうか
もしんないからね」

「で、どういう映画を誘ったのですか」

「二昨年の秋に評判になった『この世界の片隅に』だよ。いままた再上映されてるんだ。知ってた？ それをトバー君にも見てもらおうかなあって」

「そう言えば、イノ君はその映画を持ち出して、トバー君の詩を批評していましたよね。偉大な蘇東坡そとうぼに向かって、よくまあそんなことを言うものだど驚かされましたよ」

「実際に映画を見て、自分で気づいてもらおうかなあって。だって、トバー君の詩って、やっぱり抽象的というか、頭でっかちというか、理屈で通してるっていうか、なんかどうなのかなあって、いつも感じるんで」

「前回は、『抽象的にわかりやすい』ということを強調していたように思いますが、詩は抽象的ではよくないのですか」

「抽象的がいいとか悪いとかの問題ではなくて、具象的にしても、抒情的にして

も、叙事的にしても、一つだけってことではないのがいいと思うんだ。いろいろあつたほうがおもしろいと思わない？」

「ははあ、テキトーでいいってことですか。テキトー嫌いのイノ君も成長したものですね」

「トバー君も、もっと生活実感があるような、泥臭さいような、そういう詩もあつてもいいように思うんだ。理屈が先走ると、もともと900年も前の遠く離れた時代が、さらに距離があるような感じがしなくもないし……」

「そうですか。でも、今日ここに持ってきてくれた音声データも、きっと都に滞在していたころのことを話しているわけですよね」

「そうだね。今回の話は都を出る直前までだった」

「だったら、生活実感が乏しくても仕方ないと思います。都にいたこの期間は、

蘇東坡としては極端に詩が少なく、たぶん政治向きということで精一杯だったのでしよう」

「そんな感じはした。次男が生まれたとってはいたけど、それだけのことで、プライベートな生活の部分についてはなんの話もなかったんだ。もしかして、トバー君って、家のことなどまったく見向きもしない典型的なワークホリックのおじさんだったのかなあって思っちゃった。昔の人って、そういうものだったのかも shouldn't けど、ボクとしては、詩というものは『片隅』にも目を向けるようであってほしいなあって思ったりするんだ」

「いずれそういう詩も聞けるようになると思いますよ。公的な仕事で忙しい時期には、そこまで気がまわらなくても仕方がないのでないでしょうか。それで、映画に誘ったことは、このICレコーダーに入っているのですか」

「それは、録音を終えた後、またあのねずみ男のラーメン店にいったからだった」

「へーえ、また行ったのですか。まずいまずいと言いながら、よく行きますねえ」

「習慣っておそろしいよね。あの極太千歳飴の味にも慣れちゃったみたい……」

「そこは閉鎖空間ではないのですか」

「それをボクも聞いてみたんだ。古臭いガタガタのガラス戸で、すきま風とともに『気』の出入りがあるからいいのかなあって思ったんだけど、そうではなくて、

あそこは妖怪の世界に向かって開放されているからいいんだって」

「結局、妖怪なんですか。ひょっとして、妖怪の世界と仙人の世界は通じているのでしょうか？ それはそうとして、前から気になっているのですけど、その店はいったいどこにあるのですか？ ネットで検索しても出てこないですね」

「まずすぎて、だれもぐるナビに投稿しないんだらうねえ。でも、ミシユランの

裏本、『マジまずガイド』には断然五つ星で載ってるらしいよ」

「まじ出？」

* * *

——この前は、トーパー君が改革に反対する意見書を出したところで終わったんだけど、あれからちよつと考えたことがあるんだ……改革に賛成なのか反対なのか、それに限らず、何かを二つに分けるのって、どうなのかなあって。

改革派は、反対する人たちをひとくくりにして押し切ろうとしたと、トーパー君はいつてたけど、二つに分けて、そっち側はダメって、ばっさり切り捨てるのって、政治的には使いやすい手だったりするんだろうね。

ボクは性格的に、きっちりさせないと気のすまないところがあって、そういう

のにはまりやすいんじゃないのかなあって思ったりしてるんだ。AかBかどっちかにきっちり決まると安心するというか、AかBかどっちかにしないといけないと思いついてしまおうというか、それって、自分で自分に縛りをかけて苦しめてい
るんじゃないのかなあって……。

① そのようにおっしゃるあなたは、かなり冷静に自己分析をしているように見
受けられます。自分が何に縛られているのか気付くということは、すでに縛りか
ら解放されつつあるのではないのでしょうか。

——ボクが自分のことを、叔父さんやトバー君の前では「ボク」って呼んでい
るのも、たぶん、そういうのから逃れるための一つの工夫として無意識のうちに

していることなのかもしれない……でもそんな表面的なことだけでは、自分を変えらるることにはならなくて、オオカミのことを考えずに3周まわるのと同じくらいに難しいんじゃないのかなあ。

よく世論調査とかで、「どちらともいえない」という答えが一番多かったりするよと、「どっちなんだよ。はっきりさせなよ！」って、すぐに突っ込みを入れたくなるんだ。そもそも「どちらともいえない」という選択肢があるのがいらつくんだよね。そんなふうなことってない？

① 「どちらともいえない」といった選択肢を安易に選ぶのは、自分ではよく考えていないということで、結局は権力側のいいようにされてしまうだけだと、あなたはおっしゃりたいのでしょうか。その一方で、人間の思考が賛成か反対かの

2分法に支配されてしまうと、見えなくなってしまうもの、排除されてしまうものがたくさんあるのではないかと、そういうことも恐れておられるのではないのでしょうか。

——そうそう、さすが、トバー君はじょうずに整理してくれるね。

それで、ボクがなにをいいたいかというと、Aか、Aでないかのどっちかで、それしかないというのは、数学の集合論としてはきつと正しいよね。ボクのもととの性格的などころではAか非Aかをきっちりさせないと気がすまなかったりする。でも、どちらか片方であるべきだというのは、ボク個人としても社会としても息苦しさを生み出すものになっているのではないのか……そういうことなんだ。なんか矛盾してるんだけど。

それでこんな短歌みたいなのを思いついたんだ。聞いてみて。

Aと非A、Bと非Bがあるという、ボクならイロハニホイコーロ

きつとゼンゼン意味わかんないよね。解説すると、AとかBとかで分けようとして、違うものさしのイロハニホヘトを使ったらまた違って見えるんじゃないのかなあつてことなんだけど。そこから単なるころ合わせで回鍋肉ホイコーロが出てきただけなんだ。

ということで、実はね、今日は特別にマスターに裏メニューで回鍋肉ホイコーロを作っておいてもらったんだ。ほら、いまもつてきてくれたこれ、ちよつと食べてみて。

本場四川出身のトーバー君にはあんまし辛く感じないかもしれないけど。しせん

㊦ ここまでの話は、この回鍋肉ホイコーロを出すためのマクラだったのでしようか。まさ

かここで回鍋肉をいただくとは思っていませんでした。

私は確かに四川の人間ではありませんが、辛いのはそれほど得意ではないのです……ああ、これくらいがちょうどいいです。いいお味です。炭火焼の店なのに、

マスターは中華の腕前も大したものなのではないでしょうか。今度は、私の名をトンポーロウ冠したかの東坡肉を作っていたきましようか。東坡肉は全然辛くなくてむしろ

甘い味ですけど。

——ああ、そうだった。トバー君の時代にはまだ唐辛子はなかったんだよね。

そのことは前にも聞いたんだけど、四川料理は辛いという固定的なイメージがど

うしてもあつて……。人間の脳って、1回こうだと決めつけたら、そこから抜け出せないようになってしまっているのかもね。思い込みというか、やっぱ、縛りなんだよなあ。

㊦ 思い込みと言えば、我々宋の時代の人間は極度に思い込みが強かったと、後の時代の人々からしばしば揶揄されました。それもまた固定的なイメージの例であるのでしようけれど、宋の時代の人々は論争になると、黒か白か、Aか非Aか、絶対に譲らないということになりがちであったのは事実です。

直球勝負の弟は、改革のために設けられた新しい部署に配属され、新法を真剣に検討し、上司である呂惠卿ろけいけいにいろいろな意見を提示しました。しかし、一切耳を貸してくれなかったので、ここにおいても意味がない、いっそのこと都の外に出

してほしいと朝廷に願ひ出ました。その願書に、改革には多数の問題があると非常にきつい調子で書き連ね、王安石を激怒おうあんせきさせました。

弟はずっと後の晩年に至って、あるときあれほど激しい噛み付き方をするべきではなかったと述懐しています。私達兄弟はもともとは改革の方針や実行の仕方を改善して行くような議論の展開を期待していました。しかし、弟の剛速球が投げ、さらに私も「勝負手」を放つたために、黒か白か、Aか非Aか、論争はひたすら先鋭化して行き、真の意味での議論ができなくなってしまうのでした。

改革派と非改革派が一緒になごやかにこの回鍋肉ホイコーロでも食べて、視点を変えてあなたの「イロハニホヘト」で話し合ったらよかったですでしょうけれど、弟の述懐以降も、改革派と非改革派の対立は続き、それによって長年にわたって政治的混迷を招き、それが一つの要因となって北宋は滅亡にまで至ってしまったので

した。北方に新たに興った金国きんこくによって我が都が奪われたのは、王安石が副宰相になって57年後のことでありました。そのことをもって、宋の人間の極度の理屈好きが国を滅ぼしたと、後世の歴史家から批判されたのでした。

——へーえ、そういうのって、頭がよすぎて、やることは実はアホだったってことかな。

ボクなんかは頭がよくないくせに、こだわりだけがあって、ホントにアホなんだよなあ。

現代のボクらのイメージって、未来の人から見たらどうなんだろう？ やっぱ「頭が悪すぎてまさしくアホだった」ってことかもね。だって、「直し方のわからないものをこれ以上壊すのはやめてください」って、20数年前に12歳の少女

が国連で訴えたっていうことがあったのに、依然として壊し続けているんだもの。環境も社会も、どんどん悪くなっているんじゃないのかなあ。

57年っていうと、人間の一生分ぐらいの時間だよな。それぐらいで国の運命も大きく変わってしまったりするんだね。平成は31年で終わるらしいけど、さらに30年してボクも60歳を超えたところには、まったく想像もつかないような世界になっているかもしれないね。地球の気候はメチャクチャになり、そこらじゅうに手の付けられない放射性廃棄物があふれ、平等な社会なんてなものをはるか昔語りになっていたりして……。うーん、そういうのが実は想像がついてしまっているのが悲しいかも。

① 我々は、改革が国を亡ぼすような言い回しを用いて批判をしましたが、よも

や60年も経たずに本当に国が亡びるとは思っていませんでした。わかっていたら不毛な論争は避けられたかというところ、オオカミのことを考えずに3周まわるのと同じくらいに難しかったでしょうけれど。

それでは、そろそろ前回の続きをお話して行きましようか。最初に少しだけ年表的な整理しておきたいと思います。

王安石が副宰相になったのは熙寧2(1069)年2月で、同じ月に私達兄弟は都に到着しました。このとき私は34歳でした。半年後の8月に弟は都の外に出ることを希望しました。

10月にスーパースターの富弼ふひつが朝廷を去りました。私が8歳のときにその名を知った4人のスーパースターのうち「手本は范仲淹はんちゆうえん」は早くに亡くなっていて、韓琦かんきは富弼よりも先に都の外に出ていて、長安で会ったことは前回お話ししました

(第13回)。私達兄弟と父の大恩人である欧陽脩おんようしゅうは、英宗皇帝の実父をいかに

祀るべきかという数年前の大論争で疲れ切り、つとに朝廷から去っていました。

いよいよ改革が始まったとき、かねてから国政の改革を目指していたスーパースターは1人も朝廷にいないという、なんとも皮肉なことになってしまったのでした。

12月に私は「勝負手」を放ちました。スーパースターが不在となり、私がここで行動しなければとの使命感のもと、まさしく命を懸けて意見書を提出したのです。しかし、皇帝の納いれて下さるところにはなりませんでした。

年が改まって熙寧3(1070)年1月、張方平ちやうほうへいが都を出て行きました。まだ無名であった父が書いた文章を見て、都に行くべきだと言って下さった人です。張方平も王安石と対立が激化して、自ら望んで出て行ったのです。

張方平が都を去るに当たり、私は父の未発表の遺稿（ 第12回）を見ていただきました。

——遺稿というのは、なんかとんでもない人物が現れて、とんでもないことになるかもしれないって書いてあったアレだよ。それが故郷を発って都に行くという決断を促したんだよ。

① 張方平は一読するなり、深く嘆息し、

「成都で初めてお父様せいとにお会いしてお書きになったものを拝見したとき、同じ時代を生きて、かくも立派な文章を書く方がおられるということに、強く驚かされました。いまこれを拝見しての驚きは、そのときの比ではありません。お父様は

まさに神のように全てをお見通しであつたのでしょいか」

そして、こつとも言いました。

「失礼ながら、私はいま一つの下司な疑いを抱きます。このような文章は、同じ人間として決して書けるものではありません。お父様の御名に託して、貴殿がこれをお書きになつたではありませんか。この箇所などはどうでしょうか。副宰相の現在の振る舞いを見ているのではなくて、どうして書けましようか」

いまもしもこのような者がいたらどうだろうか。それは、口に孔子や老子の言葉を唱え、身は古の賢人と同じ振る舞いをし、名声を好む人、志を得ない人を集め、ともに言論を構成し、自分達で評価基準を立て、古の聖人の再来だと言い募り、しかし、陰険で根性曲りであることにかけては人から抜きん出ているというよう

な者だ。要するに、王衍おうえんと盧杞ろきを合せて一人にしたような人物である。そのような者がいたなら、そのもたらす禍は一体どうなのだろうか。

「父は、このような人物がもしもいたらと想像して書いたというのが私の理解です。王衍と盧杞を合わせて一人にしたような人間が現実存在するなどということはありません。あくまでも、もしもという前提での警告文であるといまも思っています」

「副宰相はまさしくここにある通りの人物です。いま禍が目に見えるものとなっています。お父様はこうも書いておられます。一体どこまで先が見えておられたのでしょうか」

いま私が指摘した人が用いらなければ、私が言ったことは過ちだったことになり、その人は己は不遇であると嘆くであろう。そして、禍が行き着くところに至ろうとしていたことなど誰も知らないままに終わる。もしもそのようにならなければ、天下は禍を被り、私はよく未来を知っていたと称賛されるであろう。それは悲しいことではないか。

「私はお父様をこうして称賛しています。天下にとってそれはまさしく悲しいことです。私は恥ずかしながら禍を止めることに無力で、都を出なければなりません。後は御子息に託します」

張方平も去り、さらなる使命感に駆られて私は2月に再び意見書を皇帝に提出しました。先の意見書と同趣旨で、そして、やはり皇帝の納れて下さるところと

はなりませんでした。

——ちよつと待つて。お父さんが書いたような禍がおこっているつてことになつてるけど、改革が成功すれば、国にとつても民衆にとつてもいいはずのものとして、王安石はそれを設計したんだよね。前回、王安石の詩を聞かせてもらったけど、地方官として社会の実態をよく見て改革を志していたんだよね。

㊦ その通りです。王安石は国家の大改革を大胆に計画し、その構想力は驚くばかりで、同じ時代に誰一人として適う者はいませんでした。王安石は改革が国と民衆を救うとの絶対的な自信を持っていて、そのことが非改革派の意見を一切聞こうとしない頑なさを生んだのでしよう、極めて排他的で強引な進め方をし、そ

のようなやり方では、改革の本来の効果が出るより先に大きな弊害が出てしまう
と、私は「勝負手」において指摘しました。

実際に弊害は目に見え始めていて、私が2度目に意見書を出した直後に、朝廷
を揺るがす報告書が都の外から提出されました。スーパースターの韓琦が、地方
において新法がどのように実施されつつあるかの実態を直視し、看過できない問
題点が多々あると指摘したのです。改革を推進する官僚は改革の利点だけを報告
するに違いないと私は「勝負手」で書きましたけれど、まさしくその通りで、不
都合なことが覆い隠されているということを韓琦は明らかにしたのです。かつて
宰相を務めた人の報告書の影響はさすがに大きく、皇帝は動揺し、朝廷内で非改
革派が一気に息を吹き返しそうな情勢となり、王安石は病と称して自宅に籠りま
した。

ここで皇帝は司馬光しほこうを用いようと思いました。司馬光は改革には批判的でありましたが、もともと王安石は相性がよく、司馬光なら王安石と組んで改革を修正して行くことができるのではないかと皇帝は期待しました。しかし、司馬光は王安石と一緒に政治を見ることはできないと辞退しました。王安石も同様であったことから、皇帝は王安石とともに改革をやり抜く以外に道はないと決断し、王安石は再び朝廷に出ることになりました。そして、韓琦は虚偽の報告をして政治を混乱させたということで職務の一部を解かれる処分を受けました。

——ボクは、どちらが正しいのか判断する根拠はなんにも持ち合わせていないけれど、権力のあるほうがウソをいうつてというのが、古今を通じた必然法則なんだろなあと思う。権力に都合の悪い事実は必ず消されてしまうんだよね。現実に

そういう実態をいま見せられているからよくわかるよ。

㊦ 司馬光はこのころ巨大な歴史書である『資治通鑑』しじつがんの編集を進めていました。おっしゃる通り、権力は事実を粉飾したり消したりするので、権力側が残した歴史記録は無批判に信用することはできません。司馬光は、何が歴史的事実であるのかの見極めに意を注ぎ、可能な限り実証的に文献を検討しました。理屈好きでこだわりの強い我々宋人の性質が良い方向で活かされたと言うことができるでしょう。

ついadenaながら、『資治通鑑』という書名は、即位したばかりの神宗皇帝が付けたもので、そのときに皇帝の名で序文も作りました。そのことがずっと後になって、『資治通鑑』を救うことになります。王安石の亜流のそのまた亜流の「新法党」

の連中が政権を握ったときのこと、すでに亡くなっていた司馬光を「旧法党」の大親分として憎む余り、司馬光が編集した『資治通鑑』を破棄しようと思いました。良識ある人々が、神宗皇帝の序文があるものを捨て去ってはならないと止め、偉大な文化遺産は消されずにすみました。

——それって、タリバンとかISが遺跡を破壊したのが連想されるかも。自分たちの力を誇示するために、貴重な文化遺産を破壊するのって愚かな行為でしかないよね。要するにバカ丸出しってことなのに、なぜか人間はそういうことをやりたがるんだよなあ。

① 4月、弟は、陳州ちんという町の知事として赴任していた張方平に呼ばれ、その

地の学校の教授になりました。ここでも「手本は范仲淹」でした。范仲淹も不遇の時期に、理解者に招かれて学校の教授をしていました。

7月、歐陽脩が地方から新法批判を行いました。先の韓琦の報告書と同様で、新法が実施され始めてから幾つもの弊害が現れ出ているという事実に基づく批判でした。王安石は聞く耳持たずで、歐陽脩はより小さな町の知事に格下げとなりました。

8月、父と妻の棺を郷里に運んだ4年前の旅の途中で破廉恥にも商行為に及んだと、私は告発されました。告発したのは、台諫だいかんに属する謝景温しゃけいおんという人物でした。台諫とは官僚機構の監視役で、改革をスムーズに進めるために、王安石は台諫のメンバーの大幅な入れ替えを行い、謝景温は4月に台諫の一員に加えられたばかりでした。たぶん実績を早く作りたいと急いだのでしょう、具体的な証拠な

どはないままに私を告発し、その後で私の旅の道筋に役人を派遣して調査を始めました。そのようなときに下手に弁解すれば相手の罠にはまりかねないと、私は一切対応しませんでした。しかし、皇帝の心証を甚だ害し、私は信頼を失ってしまいました。このときに私を弁護して下さったのが司馬光でした。

司馬光は、王安石と一緒に仕事はできないと辞退して以降、朝廷の外に出してほしいと皇帝に願い出ていました。皇帝は引き止めようとし、2人の間に次のようなやりとりがあったと伝えられています。

「そなたはもともと王安石と親しく、考え方も一致していたと聞いている。それがどうしていまではともに朝廷にいることができないとまで言うのか」

「確かにかつて臣わたくしは王安石と善くしておりました。しかし、王安石が副宰相そしやくになつてからは合わないことが非常に多くなりました。いま王安石を批判する蘇軾

のような者は、人格まで攻撃され、法をもつて陥れられるような目に遭っている。臣わたくしは都から追放されるような処分であれば避けようとは思いませんが、自分の人格を故なく攻撃されるのは好みません。臣わたくしは王安石と善い関係にありました。それでも呂公著りこうちやうほどではありませんでした。王安石は、仲の良い呂公著を朝廷に推薦して用いました。ところが、意見の合わないところがあると、手のひらを返すようにして呂公著を激しく攻撃しました。同じ一人の人間であるのに、最初は善いとして、後になって駄目だと言う。そのような評価の仕方を平気でするような者は信頼に値するのでしょうか」

「新法は実際に効果を上げているではないか」

「王安石の一派だけはそのように言い、天下の人々はそうではないと言っております」

「蘇軾は思ったほどきちんとした人物でなかったようだ」

「蘇軾を告発した謝景温は王安石と姻戚関係があります。謝景温が王安石の獵犬として、獲物を次々に狩り出すようなことをしたら、臣わたくしも身を保つことができません。蘇軾がいま疑いをかけられている商行為がたとえあったとしても、それによって得られる利はごくわずかでしかありません。それだけのために天下の信頼を失う行為をするような者がどこにいますでしょうか。たとえ蘇軾がきちんとした人物ではないとしても、そのだらしなさの度合いは、李定りていと比べてどうなのでしょう。李定は官職に就きたい一心で、母親の喪の期間中にあることをひた隠しにしました。王安石はその事実を認識していながら、事もあるうに、官僚の綱紀を監督する台諫に用いました。どうして蘇軾だけが批判を受けなければならぬのでしょうか」

このような問答があった結果として、皇帝は私のことをさらに追及しようとはなさいませんでした。そして、証拠を集めることもできなかつたために、商行為の一件はとりあえず沙汰やみとなりました。とりあえずと言ったのは、謝景温や、司馬光がここで言及した李定がしつこく私を狙い続けたからです。

——えーと、王安石がトバー君を攻撃するよう謝景温とかに指図したの？ それだったら、ボクが抱いてる王安石のイメージがかなり違ってしまっただけ。王安石は改革の理想だけを見て突っ走っているように感じていたんだけど。実は陰湿なところがあつたのかなあ。

① 張方平は、父の遺稿に書いてあつた通りに王安石は陰険であると考えていま

したけれど、私は、王安石は理想家で、人を罠に陥れるような悪たくみをする者ではなかったと理解しています。王安石が台諫のメンバーを入れ替えたのは、非改革派を排斥するためではなく、台諫が非改革派の最後の牙城となつて改革を阻害することを嫌つたからです。改革を守ろうとしたのです。

そして、理想家であるだけに、改革を志す人の中に不純な動機を持ち主などいないと思ひ込んでいたようです。社会を観察する眼差しは鋭くても、それを人間という存在には向けていなかったのでしょうか。王安石が抜擢した人々の中に、李定や謝景温のような二流、三流の人物が混じっていたことに気付かなかつたのは、王安石自身にとつても残念なことでした。李定も謝景温も、改革派にいち早く馳せ参じれば立身出世が約束されると、時勢に機敏に反応しただけで、実は改革の理想を王安石と共有する者ではありませんでした。改革が民衆のためになら

うがなるまいがそんなことは関係なく、改革にどれだけ貢献したかで官僚の成績を評価する新しいシステムに乗って高い地位に昇ろうとしただけなのです。だから、非改革派の中でも目立つ存在になっていた私を標的にして、己の手柄を立てることに躍起になったのです。

——そういうのって、とつても感じ悪いよね。でも、いかにもよくありがちなのが、人間として悲しいなあ。

㊦ 12月、王安石は宰相になり、国家を挙げて改革に取り組む体制が完成しました。私の立場はさらに難しくなり、首都の事務次官的な仕事から退いて、朝廷に籍を置くだけの窓際族となりました。

熙寧4（1071）年2月、科擧の二次試験が都で実施され、王安石が提案した通り、試験問題から詩賦が外されました。

そして4月、とうとう私も都を出ることになりました。赴任地は長江の南の杭州で、その副知事格でした。当初はもっと小さな都市が予定されていたのですが、皇帝の意向で変更になったようです。杭州は成都と並ぶ大都市で、そこに赴任したことで、私のその後の人生に大きく変わって行くことになります。

以上が、都に私がいた約2年間のおおまかな動きです。

それでは、「游たひの奇絶」の本題に戻って、ここからは政治向きの話を抜きにして語って行きたいと思います。

——政治的な話がこれで終わりということなら、ちょっと聞いておきたいんだけ

ど、ぜんぜん気に入らないやり方がまかり通って、でも、外から見たらトーパー君も官僚の1人としてそれを進めている一員だよ、そういうのって、メツチャ気分悪くない？ だから、いろんな人が都の外に出て行ったんだろうね。いっそ官僚を辞めるといふ選択はなかったのかな？



とうえんめい
陶淵明

陶淵明のように故郷に帰るといふことを一切考えなかったわけではありませんが。しかし、「同胞兄弟見殺しか」の歌を胸に刻んで都に来ましたので、どうかして民衆のためになることをして、官僚としての責任を果たしたいと思つていました。

——ボクとしてはさ、いまの世界のあり方が気に入らないんだよね。さつき30

年先の暗い予測をしたけど、ボクらのためにメチャメチャにされてしまった未来の人たちから見たら、「なんだかかん дайっても、そんなときの世界の一員だったじゃん」っていわれたら、「そのとおりです。ごめんなさい」って謝るしかないんだよ。この世界とはどっか違うところに帰るということはできないわけだし……。

ボクとトバー君と決定的な違いは、気に入らない世界をどうにかしようと、何一つ行動をしていないことだね。そりゃ、ボクだって、なんとかできるものならなんとかしたいさ。ブツブツ文句をいうだけでは、ホント、ダメだと思ってるさ。でも、実際、ダメなんだよなあ。

ときどきこんな想像をするんだけど、聞いてくれる？

神様がこれから生まれる赤ちゃんに、

「こっちは核兵器がある世界があります。こっちは核兵器がない世界があり

ます。あなたはどちらに生まれますか？」

と、尋ねるとするよね。それで、核兵器のある世界を選ぶ赤ちゃんっているんだろうか？ いないよね。だから、核兵器のある世界は存在してはいけないんだよ。

でも、なかには、

「核兵器のある世界をそうではない世界に作り変えるために私はそっちに生まれます」

って、勇気をもっていう赤ちゃんもいるかもわかんないよね。何が確かだといって、ボクはそういうつもりでこの世界に生まれてきたわけではないんだよ。なんの気なしにこっちにきちちゃっただけなんだよ。そしたら、知らず知らずのうちに、文字なんかを覚えて、そのせいで憂いてなものを抱くようになってしまっ

たんだよなあ **（第13回）**。いったいどういふことなんだろう？

えーと、そんなでもってなにがいたいのかというところ……なんかわかんなくなってきたんで、突然、ここでジョン・クレアが登場するってことでいいかなあ？

あの幸せそうな叫びを聞くがよい——学舎まなびやのドアが

さっと開いて、学童たちが溢れ出てくる。

蘭草いぐさの茂る荒野の上で、馬遊うまあそびびをしようと走る一群、

浅い小川で水遊みづあそびびをしながら

小魚つかを捕まえたり、石ころをひっくり返して

貝類かいりゅうを採ろうとしたりする一群。

……

ああ幸せな少年たちよ、溜め息一つ払う必要のない喜びが
君たちのものである人生の時期に、こちらを向いて微笑むのも当然だ。

(森松健介訳 91ページ)

詩のごく一部なんだけど、たぶんわかるよね。学校から飛び出てきた少年たちの
楽しそうな姿を見て詠んだ詩で、少年がほほえんだときに、ジョン・クレアの
胸に、ずきんと突き刺さるものがあつたんだろうね。少年たちにも、いずれはた
め息をつくような年齢が巡ってくると思うと、おおげさにいえば、この世界の残
酷さにやるせない気分になつたってことだろうね。

神様っていうのがいるとしたら、いったいボクらになにをさせたいんだろう？
どう思う？

㊦ それに対する答えの一つは、私の「游たびの奇絶」を聞いていただくということでしょうか。それではいけませんか。

——そうかもね。答えを教えてもらいたいわけではなくて、ただぼやいてみたかっただけなんだ。もともと神様は信じていないし……。

㊦ では、私も溜め息をついたという詩から聞いていただきましょうか。季節はいまと同じ早春、「勝負手」を放ったすぐ後の春です。

街中から奥に入り込んだ我が家において、

なお続く寒さを、私は悩ましげに過ごしていた。

痩せた馬にまたがり、雪の残る道に出てみたところ、

どこかからか春の楽曲を歌う女性の声が聞こえて来た。

いつの間にやら足を伸ばし、君の家にまで来た。

君の庭には春の訪れを知らせてくれるものがいろいろにあり、

心のうさを晴らそうではないかと、

君は酒を用意してくれた。

天の運行を司る神が、

おせっかいにも我々の年齢をまた増してくれたと、

恨みがましく言おうとは思わないが、

良い時節と楽しい事とが同時に二つ並ぶのは、

なかなかないと、大昔から決まっているようだ。

しがたない役人暮らしの歳月をこれからも重ねるうちに、

過ぎした年数の証はただ髪が白くなったということだけで、

いつしか、訪い来る人もいない門を閉ざして、

そば降る雨に打たれながら、

野菜を育てて暮らすようなことになったりするのだろう。

さしずめ今日のところは、

お上より三日の休暇を頂戴したので、

自分がいまどこにいるのかわからないくらいに、

ぐっすりと眠りたいと願うのである。

——ん？ どういう詩なのかな？ さっきいった官僚としての責務を果たせないままに年老いてしまう未来を予測して、自重気味に、ぐっすり眠ることを願うておくってことか……。だったら、ボクがぼやくのと、それほど大きくは異ならないのかな？

㊦ このとき訪ねた友人が誰だったかという説明はしなくてもよろしいかと思えます。

次の詩は、同じ頃に、故郷の友人から詩が送られて来て、それと同じ韻を用いて返したものです。その友人についての説明も省きます。詩の中に、仮病を使うということがあり、これは故郷の偉人のある故事を踏まえたちよつとしたジョークですけども、ごちゃごちゃ説明するのも野暮なので、それも省きます。

雷が軽やかに鳴ってばらばらと雨が降り、
暁に及んできれいさっぱり晴れ上がった。

春の泥は着物の裾を汚すほどではなく、
行楽によろしい時節になったのだ。

しかし、酒はあるけれど、

門から出たところで良い友がいないので、
仕方なく書物を漫然と眺めていると、

君からの手紙が届いた。

「間もなく寒食ともなれば、

遙か遠くの故郷に思いを馳せ、

酒を携えて帰りたいと、

居ても立ってもいらなくなることでありましょう」

まさにその通りだ。

君からの迎えがあったなら、

仮病を使ってもったいぶるような野暮な真似はしないで、

何が何でも行くつもりだ。

——ああ、やっぱり故郷に帰りたい思いはあったんだ。

推測するに、仮病を使って誘いを断り、再三誘われてからやっと出て行くことで、自分の存在を重く見せようとした人が昔いたってことかな。そんな真似はしないで、そそくさと故郷に飛んで行きたい気分だということをお願いしたかったん

だよね。

それで、やっかいな説明は全部省略するということではなくていいんだけど。ボクも大学で英詩を勉強して、うんちく 蕙蓄てんこもりの詩をひいひいながら解釈するってこともして、そういうのもそれなりにおもしろかったりするということは経験しているの。

㊦ では、次はお言葉に甘えて、少し解説を加えましょうか。せんそう 錢藻という人が地方都市の知事として都から出て行くのを見送ったときの詩です。

だいだいみょう 錢藻は、世が世であればという人で、日本で譬えれば、毛利氏とか島津氏のような大大名の子孫という感じになるでしょうか。唐王朝が亡んだ後に各地に分立した地方政権の一つにこえつこく 呉越国というのがありました。錢藻は、呉越国の創始者で

あつた錢鏐せんりゅうの五世の孫です。呉越国は杭州を都とし、錢鏐のもとで杭州は大都市として発展しました。先程申しした通り、後に私は副知事として杭州に赴任することになりますので、少々縁があつたというわけです。

錢藻は大名の子孫らしく風格があつて、人々から「長者」と呼ばれていました。皇帝のブレイン集団の1人として長らく朝廷にいたのですが、やはり改革派と意見が合わず、都から出て行きました。

錢藻の送別会では、当時の慣例として、見送られる錢藻が最初に五言絶句を詠み、それに使われた20個の文字を一つずつ出席者に配り、それを韻にして各々が詩を詠みました。私には「英」の字が当たりました。どのようなそれを使うのか、取って付けたように無理やり当てはめるのではなく、いかに自然に詠み込むかが腕の見せ所でした。

日旰坐邇英（日旰くれるまで邇英じえいに坐す）

という句を思いつきました。「邇英」は、仁宗皇帝のときに、皇帝が学者の講義を聴く場所として皇城内に造られた建物の名です。この詩を詠んだ春に、邇英閣において、皇帝が臨席する科挙の最終試験が行われています。この句は、神宗皇帝が新たな人材の登用に熱心に取り組んでいる有様を詠んだものです。

では、詩の全体を聞いていただきましょう。

高い志を持った人は、

都の宮殿の内で安楽に過すのは好まないとされ、

優れた手腕の持ち主は、

問題山積の地において仕事をするのが好むと言う。

貴公は地方官の辞令を得て、

朝廷で着用していた衣類を、田舎の清流で洗うことになった。

これから行かれるのは、山水がまことに佳いところだ。

まだ着かないうちから、貴公の心はすでに清らかになるであろう。

赴任の途中で貴公は故郷に立ち寄り、

土地の人々は酒を携えて喜んで郊外に出て貴公を迎えるであろう。

貴公はこうして願うところを得たわけだが、

残る者は悲しい思いに沈んでいる。

我が君は賢人を求めることに急で、

日の暮れるまでずっと邇英閣じえいに出ておられる。

昔、燕国えんの昭王しょうおうは黄金台を築いて楽毅がくきを招き、

楽毅は軍事力の増強と他国との連携を図り、

宿敵せきの斉国と戦った。

燕国は勝利を重ねたけれど、

最終的な勝利を得るには至らず、

昭王が死んでしまうと楽毅は亡命し、

黄金台は虚しく朽ちてしまった。

趙国ちゆうの孝成王こうせいおうは宝玉をもって虞卿ぐけいを招き、

虞卿は王のために種々の策を建てた。

その策は巧みであったけれど、

趙国の衰退は加速するばかりで、

眞卿自身も窮乏のうちに晩年を過ごさねばならなかった。

楽毅や眞卿のような者を招くに忙しい朝廷にあって、

貴公は卑下することなく、義を説き続けた。

しかし、その声は高い山に虚しくこだまするだけであった。

別れに臨んで、これ以上の言葉を尽くすのはよそう。


酒が醒めて後に、

言い過ぎたと我ながら驚かなければならなくなるだろうから。

——これって、いま朝廷に人を集めて大々的に改革に取り組んでいるけれど、結局は昔の事例のように失敗してしまうだろうって、かなり皮肉なことをいってる

のかな。それで酒が醒めたら、言い過ぎたと驚くだろうってことなんだよね。

政治向きのことはいわないといっただけど、かなり政治的な詩だね。こんな詩を詠んでだいじょうぶだったの？ 共謀罪とかになったりしないの？

㊦ 同席した人の中には、とまどいの表情を見せたり、顔をしかめたりする人もいました。酔った勢いでついつい言い過ぎてしまうというのではなく、自分の本性として、言いたいことを言わずにはいれないのです。我が父が、私に「軾しやく」の名を付けて下さった理由がまさにそこにありました（ 第10回）。

我が子、軾よ、そなたは外側をきちんと飾ることを気にかけないようだ。だから、無用なようでも完全であるためには必要な軾をもってそなたの名にした。

外見を飾ることにもう少し気を付けていれば、このような詩を詠むのはいささか控えたことでしょう。

次はある青年が科挙に落ちて故郷に帰るのを見送ったときの詩です。王安石が試験のやり方を変えたことが、その青年に実際に影響したかどうかはわかりませんが、科挙は軽々しく変えてはならないとの私の思いが冒頭に句には込められています。

旧くから伝わる書物を、

厭うことなく繰り返し繰り返し熟読し、

さらに深く思うならば、

君は自ずから全てを知るであらう。

そうになったならば、高い位に昇るのは、

もはや免れようとしてもできるものではない。

いまのこの足踏みをいつまでも続けてられはしないのだ。

かつて私は、人々との交わりを絶って家に籠り、

勉強に専念して、庭の花さえ見る暇もなかった。

その後、官位を慕って東に来て、

学問を捨て、子供の戯れ事のような政界に飛び込み、

愚かな百の企画、誤った百の計画は、

全て成し遂げられないままに、

白髪だけが約束事のように増え続けた。

故郷の山には私が植えた松がある。

それは着実に成長し、

じきに抱えるばかりの太さにまでなるだろう。

その木のもとに帰れるのはいつだろうか。

全ては運命の定めるところなのか。

官界での私のこの十年は、

ばかばかしいとたばたでしかない。

だとすれば、君が故郷に帰るのと私は都に残るのと、

一体どちらが得るものが多く、どちらが失うものが多いのか。

君との別れに臨んで、長く嘆息するのである。

——10年っていうのはどういうこと？ 都にきて1年くらいだよ。それと、「ばかばかしいどたばた」というのは、原文ではどういうの？

㊦ 科挙に合格してからこのときまで13年。その歳月を振り返って、何も成し遂げたものはなかったと言っているのです。

十年浪走寧非癡（十年の浪走 ろろうそう 寧ろ癡 むしち にあらざるや）

10年間の無駄な走りは愚かでないことはない、そう言っているのです。目の前の改革を止めることに全くの無力なわけですから。

——やっぱ、この詩も政治がメツチャ反映しているんだ。

それはそうとして、失意の人を慰めるというのは難しいよね。とくにトーパー君は難しい試験をすべて優秀な成績でパスしてるんで、そんな人に慰めてもらっても、どうせボクなんかとは違いすぎるもんなあと、すなおに耳に入れてくれないような感じがあったりしないかな。ひねくれすぎだ感想だけど。

でも、こんなときは、ぶっちゃつけ、いずれ必ずチャンスがあると、無責任に励ます以外に手はないよね。ボクは何度も職を辞めて、時には温かい言葉をかけてくれた人もいたんだけど、どうせありがちなことをテキストにいつてるだけだと、ホントにひねくれた受け止め方ばかりかしてたんだ。儀礼的なことばであっても、ほかにどうすることもできないんだから、ありがたいと思つて受け止めなければいけないんだよね。

科擧のやり方が変わったりしても、それに左右されずに、学問の基本に立って自己を磨くことに努めなさいってアドバイスしているんだよね。

なんのために勉強するのかってことでは、ボクなんかは世の中で最も役立ちそうにない英語の詩なんかを勉強したために、就職試験で研究テーマについて問われた瞬間に、「あつ、これできつと落とされるな」ってな感じになっちゃって、ろくな答えができなくなってしまうんだ。そもそも英語の詩を勉強したいっていったときに、母の猛反発を受けたし……よそう、母の話をするのは。またいつか、もしかしたら、聞いてもらうかもしれないけど。

㊦ 次は、ある人が船に乗って旅立つのを見送った詩です。

去りし年には、貴公が解州かいの知事になるのを見送り、

今のこの年には、貴公が和州わの知事になるのを見送る。

人が地方に赴任するのを繰り返し見送る間に、

私の胸や腸はらわたは、都の塵芥ちりあかでいっぱいになってしまった。

貴公の家は三代にわたって朝廷の重臣を出し、

貴公に至っても貴さはなお続いている。

おわとり

鳳の雛は生まれながらに鳳に、

名馬の子は生まれながらに名馬になるように、

貴公に伝わる非凡な風格を見れば、

必ず剣を帯びたまま皇帝のもとに伺候するようになるのと知れる。

しかしながら、

貴公は小さな町から馬に乗って都に帰って来たばかりで、

今度は船に帆を上げて、

また小さな町へと慌ただしく出て行かなければならない。

私こそ、川や海をさすらうのが性に合っているはずであるのに、

恥を忍んで、ここらでうろうろしている。

貴公を見送り、言葉なく嘆息する。

ああ、河の水はかくも美しく、

かくも遙かにどこまでも流れて行く――

――それって、川の流れに乗って遠くに行きたいと、そんなふう思ったってことだよね。



詩の終わりは、原詩ではこのようになっていきます。

無言贈君有長歎（無言、君に贈って、長歎する有り）
ちようたん

美哉河水空洋洋（美なる哉 かな 河水 むな 空しく洋洋たり）
ようよう

「空しく」というのは、何も無い、からっぽである、無価値であるといった意味ではなく、人間的な価値観に縛られない、無限の空間の広がりの意味すると受け止めていただけたらと思います。

——旅へのがれかあ。流れる水に誘われ、フーテンのトーパーになりたいと

いう思いが、

美なる哉 河水 空しく洋洋たり


に、こめられているってことなんだね。なんか、わかるなあ。いやなことに耐えているうちに、こっちがおかしくなってしまったら、それこそ大損なんだから、さつさとバイバイしたほうがいいんだよ。でも、そういうことばっか繰り返すのも、たしかにまずいとは思うけど。

㊦ ほうしよう かつて鳳翔では、初めての官僚暮らしのストレスによって、「5月病」に悩

まされました㊦ 第7回。このときは私もいくらか成長したのと、ある2人に救

われたこともあつて、病んで寝込むということにはならずにすみしました。

2人とは、5年ぶりに会った友人と、都で誕生した私の次男です。次男は熙寧3（1070）年5月に生まれました。このとき長男はすでに13歳になっていましたから、久しぶりに赤ん坊を抱いたのでした。

友人は文同ぶんどうです。覚えておられましようか、鳳翔の開元寺かいげんで王維おういが描いた竹の画を見ていたときに、いつの間にか傍らせいちくに立つ人がいて、「竹を描くには、心の内に筍を置き、それを大きく育てて成竹せいちくになったとき、万物を生み出す自然の作用に任せて筆を動かせばよい」という説を教えてくださいました人です（ 第9回）。

——なんか聞いた気がするかも。えーと、その人は最初の奥さんのお兄さんと一緒に鳳翔にきたんじゃないやなかったっけ。そうだよな。そのとき奥さんは病気で、自

分が亡くなった後のことをお兄さんに頼んだんだよね。そうだよね。

㊦ その通りです。

文同は地方での任務を終えたことを朝廷に報告するために、ちょうど次男が生まれたところに都に来ました。会えばもっぱら画や書について語り合い、政治世界のごたごたを忘れることができました。

文同との交流から生まれた幾つかの短い文章を聞いていただきましょうか。最初は、文同の竹の画に添えた跋文はつぶんです。

かつての文同は、質の良い紙を見ると、すぐに気持ちが高ぶり、居ても立ってもいられなくなり、自分で自分を制止できないままに筆を揮い、竹を描いたものだ。

描き終えた墨の竹を人々が争うようにして持ち去っても、文同は少しも惜しみはしなかった。

その後、人々が筆と硯を用意して待ち受けるようになる、文同はもぞもぞした挙句に、ぷいと逃げ去るようになった。人が何とかして頼み込んでも、一年経っても、二年経ってもなかなか描いてもらえなくなった。

ある人がその訳を尋ねると、文同はこう言った。

「私は、道を学んで理解できないところがあると、思いが停留してどうすることもできなくなり、それが一気に噴出すると、墨の竹となったのです。それは私の病やまいであつたのでしよう。今はたぶん病が癒えたのだと思います」

しかし、私が見るところ、文同の病はまだ治っていない。身の内に納めていられないものがあれば、どうしたって発せずにはいられないのだ。私はその発する

頃合いを見計らって竹を描いてもらい、その画を我が物とした。こうして文同の病を利用するのは、実は私にも同様の病があるからなのだろう。

——文同という人は、心静かに竹を描くのではなく、実は激情家で、やむにやまれぬ思いの発露として画があるってことなんだね。トーパー君にもそういうところがあるから共感するんだろうね。トーパー君は腹の内にある言葉を出さずにはいられないってことかな。

㊦ どう 文同はひたすら竹ばかりを描き続け、その画を納めるための堂を建て、「墨君ぼくくん堂」と名付けました。その由来を書いたのが次の文章です。

「墨君」というのは墨で描いた竹を意味するということは、これから聞いてい

ただけばおわかりになると思っています。

一般に人が人を呼ぶとき、相手が貴人であれば「公こう」と言ひ、相手が賢人であれば「君くん」と言ひ、それ以下であれば「爾じ」とか「汝い」とか言う。公卿の身分にある人で、その地位に畏れはしても、心に服さないときには、世間の人々は公的な場では「君」と言いつつも、私的な場では「爾」とか「汝」とか言つて軽んじるのはよくありがちだ。

かつて、王徽之おうきしが人から空き家を借りてしばしの仮住まいをしたとき、すぐに竹を植えたので、

「どうせじきに出て行くのだから、何もわざわざ『爾それ』を植えるまでもなからうに」

と、ある人が言った。

王徽之は、

「かの『君』なくして一日も過ごせるものではない」

と、答え、それ以来、天下の人々は、竹は必ず「君」の敬称で呼ぶようになった。

文同は墨で竹君の姿を象るのを得手ちくくんとしている。墨で竹を描いた「墨君」を納めるための堂を作り、竹君の徳を頌ほめたたえる文章を書くよう私に言った。文同が竹君に寄せる思いはまことに厚いものがある。

文同の人となりはと言えば、沈着冷静でありながら華やかさがあり、聡明冷徹でありながら真心がある。潔さを身に具え、広く物事に通じようと、朝夕に己を磨く努力を重ねている。文同と交際したいと願うのは、一人だけだということは全くないのだが、文同が厚く思いを寄せるのはただ一人、竹君だけである。

竹君は飾り気がなく、しなやかで強い。人の耳、目、鼻、口を楽しませる声や色や香りや味はない。文同が竹君を厚く思うのは、竹君が賢君であると考えるからだ。

世間というものはなかなかに厳しい。人を震え上がらせたり、冷や汗をぐっしょりかかせたりする。だからと言って、霜や雪や風や雨が直接に肌に当たる厳しさほどのことはない。それでも、世間の厳しさに挫け、己の保持するところのものを見失ってへらへらしている連中は少なくない。植物を見ても、季節の移り変わりに応じて大きく変わるのが普通だ。しかし、竹君だけは四季に左右されるところがない。

竹君は賢君であると、文同でない人も言いはする。しかし、文同こそは竹君を最も深く理解し、竹君が賢君である真の理由を最もよく知っている。文同は談笑し

ながら筆を執り、獅子奮迅の勢いで墨を注ぎ、竹君の徳をことごとく描き切る。

文同は、竹君の幼い姿も、成長した姿も、老いた姿も描き、折り曲げられて一度は伏してもすぐさま立ち上がる勢いを描き、風雪の厳しさの中でも保っている本性を描き、切り立った崖にあっても真っ直ぐに伸びようとする志を描く。思いのままに大きく成長して高々と茂っても驕らず、思いの通りにならなくて小さく低いままでも恥じ入りはしない。群がり立っても依存し合わず、一本だけでも恐れるところはない。

文同は竹君の情を完全こころごとくに理解し、その本性をことごとく描き切る。

私はまだまだ竹君を知っているとは言えない。文同に習って、文同の墨君の弟や子や孫や友人の象かたちを描いてみたいと思っている。行く行くはその画を我が部屋に納めて、墨君堂の別館ということにしたいものだ。

——そっかあ、トバー君も詩だけじゃなくて画を描くんだったよね。それはそれでいいんだけど、やっぱ、トバー君って理屈っぽいよね。竹を描くことも、人間の生き方と関連づけて論じてしまっただもの。理屈でわかるようなことであるのなら、画にしなくってもいいんじゃないのかなあって、思うのってヘンかな？ 思いが爆発して竹を描くって書いていたけど、大事なのはそこだね、きつと。理屈で説明できるようなことなら、画に描かなくてもいいわけだから。

① 画とは何か、詩と画は何か共通するところがあるのか、いろいろと私は考えたことがあります。

都に浄因院じょういんという禅寺があり、その住職を道臻どうしんと言いました。文同と道臻は古

くからの知り合いで、かつて道臻の住まう方丈ほうじょうに竹の画を描いていました。

文同は半年余り都に滞在した後、熙寧4（1071）年春に、私の郷里りょうりに近い陵陽りやうの知事として赴任することになりました。文同は道臻に別れを告げに淨因院を訪れ、私も同行しました。そのときに書いたのが次の文章で、一つの画論を展開しています。

かつて私は次のように画を論じた。

人物、動物、建物、器物などには皆それぞれに固有の形、つまり「常形」じょうけいがある。山や石や竹や木、あるいは水や波や霧や雲には決まった「常形」はないけれど、それぞれに固有の本質、つまり「常理」じょうりがある。

画を描いて「常形」を失っていれば、人は誰もがそれに気付く。しかし、「常理」

から離れている場合には、画を理解している人でも気付かないことがある。だから、世間を欺いて画で名を成そうとする者は、必ず「常形」のないものを描くのである。

画を描いて「常形」を失った場合には、そのものの形がおかしくなるだけで、画全体が台無しになってしまうわけではない。しかし、「常理」が当たらない場合には、画全体がすっかり駄目になってしまう。「常形」がないだけに、よくよく謹んで「常理」に心を用いなければならないのである。

「形」を徹底的に正確に描き切るのは、世間の技量の優れた人なら為し得るところである。「理」までを画に描いて見せてくれるのは、世間から超越した「高人」であり、卓抜した才能「逸才」の持ち主でなければならぬ。

文同が描いた竹、石、枯木は、まことにその「理」を得たと言うべきである。そ

の画を見れば、竹はこのように生じ、このように死に、このように屈かがまり、このように曲り、このように痩せ、このように縮まり、このように枝が伸び、このように葉が茂るものと、人の心を十分に満たしてくれぬ。根、茎、節、葉、牙、角、脈筋は千変万化し、始めから終わりまで同じものはないのだけれど、それぞれが全てあるべきところにあつて、天の造化の「理」に合致していると、完全に人を得心させる。それはすなわち画を見る者が、達人の精神の内に包み込まれるということあるのだろう。

文同はかつて浄因院の方丈にふた群れの竹を描いた。そして今、西に出て陵陽に赴任するに当たり、浄因院の長老の道臻師に別れを告げに来て、私もここに同行した。文同は方丈の隣の部屋に、二本の竹と一本の枯木を描き、さらには本堂の四方の壁を白く塗り替えたばかりであるので、そこにも竹を描いてくれぬかと道

臻師に頼まれた。文同は快諾し、その経緯を私が記すことになった。

後にここに「理」をよく知る者が来て、深く文同の竹の画を観るならば、私がここに書いたことが妄言ではないとわかってくれるであろう。

——「常形」と「常理」という概念を使って、画の本質は何かを論じたんだね。

技術があれば「常形」は正確に描けるって書いていたけど、言葉を用いて形を描写するのは難しいというか、ほぼ不可能だろうね。たとえば、このスルメの形を、スルメを見たことのない人に、言葉だけでわかるように説明するのって、まずできないよね。だけど、スルメと知っている人が相手なら、スルメの本質、トーバ―君がいう「常理」を伝えるのは、スルメという言葉を発するだけでとくに努力をしなくてもできてしまうよね……違うかなあ。だって、相手の心の内にすでに

スルメの「常理」はあるんだから。短歌とか俳句とかの非常に短い詩は、そういう「常理」を共有し合っていることを前提に成り立っているってことだったりするのかな。

画と言葉にはそれぞれ得手、不得手があるってことなんだろうけど、いま思い出したんだけど、ボクがジョン・クレアの詩に初めて出合ったのは、叔父さんの本棚にあった英詩の本で、その本はおもしろいことに、一つの詩に必ず一枚の画像が添えられていたんだ（松浦暢編訳『英詩を愉しむ』平凡社（1997））。エクラシス理論っていうらしいけど、言語表現の理解に視覚表現がなんらかの相乗効果を及ぼすってことみたい。言語と視覚って、共通するところもあればゼンゼン異なるところもあって、論じ出すと難しいよね。

ⓧ 文同とは浄因院に行ったのがひとまずの別れとなり、次のような詩を贈りました。

壁に描かれた「墨君」は言語を理解しない。

それでも「墨君」を見れば百の憂いを消すことができる。

我が友は「墨君」に似て、しかも言語を理解する。

友の節義は秋の霜のように純白で凛々しく、

健やかにして清らかな詩を詠み、

思想性は道家の真骨頂に迫る。

地位を下げられても意に介することなく、

暁の風に髪を自在になびかせて、

舵を操って長江を遡って行くことだろう。

川を巡る山々が朝焼けに赤々と照り映え、

千山のそのまた彼方に友の行く陵陽はある。

我が友は、遠く別れて行ってしまおうと、

私の心持ちが悪くなるのを知っている。

だからこの「墨君」でもって、

我が憂いを解くようにと言う。

墨で描いた竹、「墨君」で心を慰めよという文同の配慮でありましたが、友が去ると、都にるのがいよいよ辛くなつて来ました。


この後も人を見送ることが続き、そうした詩をさらに三つほど聞いていただき

ましよう。

——えーと、非改革派の人が続々と都から出て行ったので、送別詩が多くなったということなの？

㊦ 文同は改革に懐疑的で、都では冷遇されて地方にまた出されたのではありませんが。そういうことがなくても、地方に勤務していた者は任期を終えると一度は都に戻り、そして次の辞令が出ると別の任地に向かって出て行きますので、とかく都は人の出入りが頻繁で、都にいれば自ずと送別の詩をたくさん詠むようなことになります。

次の詩では、げんせき阮籍という人の故事を用いています。「竹林の七賢人」の一人であ

った阮籍については、最初の官職に就くために都に向かった旅の終わりの頃に、阮籍に所縁の町で詩を詠んだことをお話しています（ 第5回）。たぶん記憶にないかと思いますので、その詩をもう一度申し上げます。

阮籍は達人にして狂人だった。

世を逃れ、言葉を発しなかった。

高い志は万物の上に出て、

世俗の論に関わらなかった。

胸の内に意気が充満すると、

独り高台に登り、

身もだえし、

息とともにそれを吐き出した。

阮籍の激越な思ひは、

大地を揺り動かさんばかりであった。

酔っては昏々と眠り、醒めては嘔うそいた。

乱世に生きながら己を貫いたことにおいて、

阮籍に比べられる者がほかに誰かいただろうか。

——いよいよこれから政界に身を投じようとしていたときに、どろどろとした世界でやっていけるだろうかとの不安があつて、阮籍に思いを馳せたという詩だっただんだよね。実際のトーマー君は、「世俗の議論」に関わらないどころか、まさしく政争の渦のまっただなかにはまってしまうんだ。



渦中にあつて再び阮籍を思ったのがこの詩です。

貴公は知っているだろう、

阮籍が人の良し悪しを決して口にしなかったのを。

吾輩には舌があり、硬い歯があると、誇ってはいけない。

舌や歯は、旨い酒を飲むためだけに使うのがよい。

書物なんぞはたくさん読まないのがよい、

詩なんぞは巧みでないのがよい。

貴公がこれから行く海辺の地は何もないところだ。

毎日毎日酒に酔っていればよい。

間違っても夢に朝廷を見たりしないのがよい。

私は来るべき春の味覚を貴公と楽しみたいと思っていた。

しかし、昨夜、庭の木に秋風を感じたばかりであるのに、

貴公はもう遠くに行ってしまうのだ。

貴公は行ってしまっっていつ帰るのか。

貴公が植えた桃の木に花が咲くのはいつの春なのか。

すっかり白髪になったしまった貴公が、

その花を愛でることになるのだろうか。

——最後の部分は、白髪になっても戻ってくることはないかもしれないと、そういう含みなんだろうね。全体として、別れる相手のことをいっているというより

も、トーパー君自身のことだったりする？ だって、書物をたくさん読み、詩を上手に作り、俺には舌がある、歯があると、自分の思うところを主張してっていうのは、トーパー君そのものじゃん。

㊦ 次は、まさしく思うところを主張した人に向けた詩です。その人はある刑法の解釈を巡って王安石と論争に及び、双方断じて譲らず、政治力によってその人は敗れ、都を出て行きました。詩では、その論争について、直接的ではなく、故事を用いて婉曲に、しかし奥深い意味を込めて詠んだのですが、そのあたりのことを解説すると長くなるので、あたかもあからさまに表面的に詠んだかのように訳します。

貴公が人と交際しているありさまを見ていると、

大きな声で笑いながら語るのでは、

貴公が一番だと言ってよい。

まことに大らかであり、

おやっと怪訝に思わせるようなおかしなことはない。

しかし、何か事があったときに、

迂闊な振る舞いに及んでしまうのでは、

私以上であるようだ。

前に落とし穴が見えていけば、

誰だって気を付けるし、

道に金銀宝石がばらまかれていけば、

誰だって拾おうとするだろう。

そういう場面で、世間の人はころっと変わり、

堅物だかたぶつと評判だった人が、

たちまちぐんにやりしてしまったりするものだ。

貴公ときたら、

たった一人で昔の法規を守り続けようとしたために、

船を漕いで遠くに行かねばならなくなってしまった。

まことお気の毒さまである。

天をも駈ける馬が、

そこらののろまな牛の後ろにくっついて、

ひよこひよこ歩かなければならなくなったと、

嘆いたりしなさんな。

猛火の中に投げ込まれてこそ、

宝玉はその真価を発揮すると言うではないか。

世間の事は一炊の夢のようなものだ。

人生がどこまでもがたがた道ということでもないだろう。

貴公が法の基本を順守しようとしたことで、

救われた者も多くあったのだから、

貴公自身には返って来なくても、

その徳の報いは、必ず貴公の子孫に及ぶであろう。

終わりの部分は、いんとく陰徳の報いは子孫に及ぶという昔の考え方に基づいているわけ

ですが、長い目で見て正しいのはどちらであるのか、必ず明らかになるといことが言いたかったです。

——先祖がよいことをした報いが子孫に及ぶ、逆に悪いことをした報いも及ぶというのは、なんか感じ悪いかも。子孫のことまでも考えて行動しなさいという戒めとしてなら、未来世代を考えよという持続可能性の原則にも通じたりするのかな、もしないけど、先祖がよければ子孫もよい、先祖が悪ければ子孫も悪いというのは、格差を固定する支えになったりするよね。いま結構なご身分でいられるのは、先祖が立派だったんだから当然だって、いばつちやうわけだから。議員さんなんかにそういうのがたくさんいるみたいだしなあ。そういうえば、さつき大太名の子孫のことを詩に詠んでいたっけ。やっぱ価値観の違いはあるかも。

㊦ 三つ目の詩は曾鞏そうきょうという人に贈った詩です。曾鞏の名は、確かずっと前に言及しているかと思えます。私と同時に科挙に合格した人です。科挙の二次試験で、スーパースターの欧陽脩は私の答案を読んで主席にしようとし、しかし、この答案は自分の弟子が書いたのではないか、弟子を一番にしたら身贖をしたと疑われてしまうと、第二位と入れ替えたところ、かえって弟子の曾鞏が主席になってしまったのです。その曾鞏には曾布そうふという弟がいて、曾布も同じ科挙で合格しています。

——へーえ、トバー君と同じように兄弟同時の合格だったんだ。そういうのって珍しかったんだろうね。

㊦ 同時合格でも兄弟で性格は異なるもので、弟と私の違いは再三お話して来ました。曾鞏、曾布の兄弟の場合は、兄は地味にこつこつ仕事をするのを好み、弟は派手に目立つ活躍をするのを好みました。兄弟は王安石と遠い姻戚関係があり、長く親しくしていました。神宗皇帝が即位して間もなくのこと、「王安石はどのような人物か」と、曾鞏に尋ねました。曾鞏は、「非常に賢いけれど、自分と異なる考えには過剰に反応して執拗である」と、その欠点までも正直に述べたと言われています。改革が始まると、曾鞏は次第に王安石に批判的になり、その執拗な面が顕わになって、ついには都から出て行かざるを得ないことになってしまいました。

一方の弟の曾布は、改革を活躍のチャンスと捉えたのでしよう、自ら進んで王

安石の手足となって働く道を選びました。宋の朝廷では、複数の宰相と複数の副宰相の合議によって政策が立案、執行されるようになっていて、特定の一人が独走できないような仕組みになっていました。曾布は改革を迅速に進めるために、王安石が「よし」と決めたなら、他の人間にいちいち相談するまでもなく、議決書を回してサインさせるだけにしたらよいと提案しました。

——そういうのって、古いことばでいうと、ちようちん持ちをするっていうんだっけ。そんな人って、いつの世にもいるんだね。

㊦ 弟が改革派の主要人物として目立って活躍する陰で、兄の曾鞏の送別会が開かれ、例によって集まった一同が別れの詩を詠み、このときも一文字ずつ韻字が

配られ、私には「燕」の字が当たりました。それで思い付いたが次の句です。

楽生老思燕（楽生は老いて燕を思う）

「燕」の文字を鳥のツバメの意味ではなく、昔の「燕」という国の名として用いています。「楽生」とは、「楽さん」あるいは「楽先生」という意味で、「燕」と「楽」が組み合わせれば、楽さんとは、先程の詩でも引いていた楽毅のことであると、歴史に通じた人ならすぐにわかります。

——まあ、ボクにはもちろんわかんないけど、昔むかしにクイズ番組とかあったら、ぱつと答えられないといけないような感じなんだろうね。

㊦ 楽毅の故事をここでまた用いているのは、私に少々のごだわりがあるからです。というのは、26歳のときに受けた特別試験の制科で書いた論文の一つで、楽毅について論じているのです。さて、どうしましょうか……かなり脇道に逸れなくても構わなければ、その論文についてお話したい気もするのですが。

——制科っていうのは、科挙に合格した人が受けるさらに難しい試験だったよね。そういう答案をトーパー君が書いたのか、興味なくはないけど。でも、聞かせてもらっても、ボクなんかには理解できないんじゃないの？ だって、司法試験とか大学院の試験とか、それより上のレベルの試験なわけだよ。そもそも楽毅がだれなのさえ、ボクはまるっきり知らないんだし。

㊦ そういうあなたに理解していただけるよう平易にお話できるのか、チャレンジしてみたいと思います。

制科の論文では、昔むかしの中国人が、政治の理想と現実についてどのような考えていたのか、その一例となるような議論を展開しています。高い理想を掲げることが大切ですが、しかしながら、それだけでは現実を変えることはできません。理想が立派過ぎて、身の丈に合わない、むしろ大失敗してしまうようなこともあるでしょう。私も含めて宋の時代の人々はとかく理屈っぽく、理想を説きたがることが多かったわけで、下手をするとそれは天下の笑いものになるだけになってしまうと、いわば自戒の念も込めた論文であったとも言えるでしょうか。

適宜解説を織り込んで訳すことにしましょう。

為政者が徳をもって天下を治めるのを「王道」と言い、武力をもって治めるのを「霸道」と言う。「王道」を用いて「王者」になった例としては古代の三人の王が有名であり、「王道」を用いることができなくて「覇者」になった例としては春秋時代の五人の王が有名である。

ある人は、「王道を用いようとするならば、もしもそれが成功しなかった場合でも、一歩下がって霸道を成し遂げることができであろう」と論じている。本当にそうだろうか。五人の覇者が三人の王者の真似をしていたなら、ただ単に大失敗するだけだったのではないだろうか。

私が考えるに、王道というものは小さく用いることはできない。大きく用いれば王者になるが、小さく用いたならば亡ぶだけである。

昔、徐の国じょの偃王えんおうは、仁義を重んじて王道政治を志し、民衆を戦争に動員するのをためらったために、敵国の侵入を防ぐことができず、結局は国を亡ぼしてしまった。宋の国の襄公じょうこうも仁義を重んじて王道政治を志し、人の弱みに付け込むのはよくないことであるとして、戦闘の好機を自ら逃し、国の命運をかけた戦争で大敗してしまった。

二人はなぜ国を亡ぼすような失敗をしたのか。二人が実際に行ったことと、二人が求めたものがかけ離れていたからである。二人は王者であるとの評判を得たくて、王道を矮小化して用いたのである。天下の人々の評判を気にするのではなく、徳によって天下に正しい統治を及ぼせる者だけが、真の王者となり得るのだ。

この二人とは逆に、王道などは念頭になかったけれど、剛毅にして果敢にも迷わず事を成し遂げた者がいた。その一例が范蠡はんらいである。越の国の王の勾踐こうせんは艱難辛

苦の末に呉王の夫差を破った。越王の軍に包囲された夫差は懸命に命乞いをし、

越王は夫差を憐れに思い、赦してやろうとした。そのとき范蠡は、呉王の使者を

追い帰して軍を進め、夫差を自殺に追い込み、将来の禍根を絶ち切った。もう一

つの例が張良だ。漢の高祖は、旗色が悪くなった項籍が戦闘を止めて東に引き

上げようとしたとき、自分も戦闘を止めて西に帰ろうとした。項籍と天下を二分

することで満足しようとしたのだ。しかし、張良は「天が項籍を亡ぼそうとして

いるのです。いま急襲し、それを逃してはなりません」と言って高祖に戦わせ、

ついには項籍を撃ち取って天下を統一した。

この二人は、ちまちな仁義を守ることを、大きな成功を勝ち取ることよりも優先

させはしなかったのである。

以上が論文の前段で、後半で楽毅を論じます。

——えーと、もしかして、トーバー君は日本国憲法の第9条は非現実的だと思っ
てたりする？ 敵が攻めてきたときに備えがなくてどうするのかって、憲法改定
論者は必ずいうよね。万田先生とかいう人は「敵が攻めてきたら9条信者を前線
に送ったらいい」とか発言したらしいね。それを聞いて、自衛隊の人たちにとつ
てなんて失礼なことをいうんだろうって、ボクは思ったんだけど。だって、万田
先生が心底バカにしている人たちに、懲罰的な意味で、前線での戦いを任せろと
いってるわけでしょう。自衛隊の立派な任務を罰ゲームにするのって、メツチャ
おかしいよね。

㊦ 王道は大きく用いなければいけないというのが私の考えです。自国に閉じこもって、憲法9条だけを後生大事に守っていたら、何かのときに、それこそ徐の偃王と同じになってしまおうでしょう。世界の平和を構築することと結び付けてこそ、憲法9条が日本の平和を守ることになるでしょう。例えば、先程あなたがおっしゃっていた核兵器のない世界を作るようなことです。

それでは、論文の後半です。

楽毅はいかなる人物であったのか。戦国時代の英雄の一人ではあった。しかし、王道が大きなものであるということを知らなかった。王道を聞きかじっただけで、自分も使ってみようとしたがために、我が身を破綻させてしまったのだ。

楽毅は、燕の昭王が自分を全面的に信頼して用いてくれたことに応えようと、宿

敵の斉国に攻め入り、五年にわたって敵地で戦い続け、斉国の七十余りの町を占領し、残る敵の拠点は二カ所だけとなった。そのとき昭王が死に、息子の恵王が立つと、斉国の間者は「楽毅がたった二つの町をぐずぐずいつまでも征服しないでいるのは、斉の地で独立して王になる機会を伺っているからだ」との偽の情報をも燕の国に流した。もともと楽毅の存在を煙たく思っていた恵王とその取り巻き連中は、別の將軍を派遣し、楽毅を本国に召還しようとした。楽毅は帰国すれば殺されてしまうかも知れないと恐れ、隣の国に亡命した。楽毅がいなくなると、斉国はたちまち息を吹き返し、占領されていた土地をことごとく取り返し、昭王と楽毅の努力は虚しく消えてしまった。

だから、燕の恵王が愚かで、間者の言うことを信じたために、楽毅の事業は不幸にも成就しなかった、楽毅自身のの軍事的失敗ではないと、多くの人は論じてい

る。

私はそのようには考えない。もしも昭王が死ななくて、偽の情報の間者が放つても無効であったとしても、楽毅はきつと失敗したに違いない。どうしてそのように考えるのか。

第一に、燕国が斉国を併合することは、当時、秦国、楚国、晋国などの列強にとって利益にならなかった。燕国は百万と号する軍団を外に出して、残る二つの町を攻めて、数年かかって決着がつかずにいた。大軍が長く外に出ていれば、国は疲弊し、必ず事を為そうとする者が内に出て来るものだ。国の内側が乱れ、そこを外から攻めたならば、いかなる名将であっても防げるものではない。

第二に、楽毅はわずか二つの町を、百倍の兵力で攻めて、数年がかりでも勝てずにいたのは、その智力が不足していたからではない。楽毅は聞きかじりの王道を

用い、仁義の心で斉国の民衆を己に靡かせようとしたからである。一気に攻めて斉国の民衆の怨みを買うことになるのを避け、王道を用いたとの評判を立たせたものだと思っっているうちに、長い時間を使ってしまったのである。

楽毅のその考えには根拠がなかったわけではない。斉国の民衆は、斉の湣王^{びん}の横暴に苦しんでいたのだから、もしも楽毅が一度戦闘を止め、法令を整え、税金を安くし、斉の民衆を村落に帰還させて、安定した暮らしを保障したならば、一体誰が斉国ために立ち上がって戦おうなどと思ったりしただろうか。それこそが王道というものではなからうか。

しかるに、楽毅は百万の軍団を率いたまま、斉の民衆が心服するのを待ったのだ。これは、斉国にじっくりと国土回復の謀を為させるための時間を与えただけであったのである。

この当時は戦国の世であった。軍事的に強いところが弱いところを併呑することが普通に行われていた。楽毅が斉を攻めて滅したところで、誰も非難できなかったし、楽毅が王道を真似てみせたところで、それを褒める者は誰もいなかった。つまり、王道を大きく用いる者は王者になるが、王道の何たるかを心得ずに形ばかり用いたのでは、失敗しても覇者になるということではなくて、結局のところ王者にも覇者にもなれず、ただ天下の笑いものとなってしまふのである。

——ふーん、なんかよくわかんない議論んだけど……。理想は王道であるけれど、ヘンにカツコつけて失敗するよりは、容赦しない決断をした方がいい場合もあるってことかな。大きな事業を成し遂げるには、そういう非情な面がなくてはならないってことかな。

㊦ 目指そうと思っていることと、実際にしていることが乖離していると、生まれるものは何もあります。先の詩では、このような議論を意識の片隅に置いて、現在の改革も同様な乖離によって虚しいものに終わってしまうであろうとの予想を歌ったのです。

今度の詩では、一転して、楽毅を天下の笑いものとしではなく、悲劇の英雄として見えています。

楽毅が亡命したその後の話として、燕の恵王は偽情報を信じて楽毅を失ってしまったことを反省し、楽毅を呼び戻そうと、自分の誤りを認めた手紙を送りました。それに対する楽毅の返書は、読めば必ず涙がこぼれると評されました。恵王に対する敬意を失わないよう抑制しつつ、複雑な胸の内側が綴られています。楽

毅には、燕国に戻ってもう一度活躍したいとの気持ちが強くなり、その一方で、恵王との間には先の王との間にあったような信頼関係が築けるとは思えず、帰還しても再度の亡命を余儀なくされてしまっだろうと、恵王の誘いを断ったのでした。

——先代社長に仕えたやり手の専務を、若社長が煙たく感じて辞めさせたところ、会社の業績が急激に落ちてしまったので、やっぱり専務にもどってきてもらおうということになったときに、専務さんとしてはどうすればいいのか、かなり難しいところだろうね。

Ⓣ 断られた燕の恵王は、楽毅の子を重く用いて、再度楽毅を呼び戻そうとしま

した。それでも楽毅は燕には帰りませんでした。ただ、燕への思いは強いものがあり、息子を通じて燕との縁を保ち続けたのでした。

というわけで、

楽生老思燕（がくせい 楽生は老いて燕を思えんう）

という句は、いま都を去る曾鞏を楽毅に譬え、一度は朝廷から遠ざけられても、必ず後には惜しまれるようになるということと言ったわけですから。

——ひゃーっ、一つの句を理解するのに、こんだけの背景を知ってないとならないんだ。それだけ深くてもおもしろいということもあんのかもしれないけど。

㊦ では、さらに深みにはまっていたくださましようか。三国時代の夏侯玄かこうげんという人が楽毅について論じた非常に有名な文章があります。試しにネットで「楽毅論」で検索してみてください。どうですか、出てきますでしょうか。

——ああ、ホントだ。いろいろあるけど、「コトバンク」を見ると、ブリタニカ国際大百科事典の解説として、えーと、「中国、戦国時代の燕の武将、楽毅についての人物論。三国魏の夏侯玄の撰。東晋の王羲之おうぎしが書いたと伝えられる小楷書の法帖が著名。現存のものは異本が多く、明の『余清斎法帖』（1596～1614）に刻されているものが比較的よいといわれる。正倉院宝物中に光明皇后が中国伝来の双鉤填墨本そうこうてんぼくを臨模したとみられる『楽毅論』1巻があり、王羲之の生氣に満

ちた筆力の強い書風がうかがわれる」とあって……言葉が難しくてよくわからないなあ。

㊦ 夏侯玄の「楽毅論」はその内容よりは、王羲之という書の名家が写したものが書の手本とされたことで有名になりました。

——光明皇后がそれを書いたものが正倉院にあるってことかあ。ウィキペディアの解説には、「日本の書道史上殆ど類例のない強く深い起筆、強い送筆、そして強く深い終筆のもつ表現力」という評価があるね。ふーん、ゼンゼン知らなかった。

㊧ 夏侯玄は、楽毅が書いた恵王への返書を読んで感動し、これほどの人が大事

業を成し遂げられなかったのを惜しみ、どうしてたった二つの町を最後まで占領できなかったのか考え、武力によって征服するのはたやすいことではあるが、それでは征服された側が完全には承服しないので、住民自らが靡いて来るのを敢えて待った、つまり楽毅は王道を用いようとしたと論じたのです。

先の私の論文はそれを踏まえてのものでした。

——1人の人物に対して、いろんな論じ方があるってことだね。いいか悪いか、どっちかではなくて、要するにボクが最初に回鍋肉ホイコーロでいったことだね。

小中学校で道徳が正式の教科として評価の対象になるってことなんだけど、いまの話なんかはまさしく道徳って感じのことかもね。中国の知恵ある人達から昔から論じてきて、答えは一つにならないんだけど、道徳の先生はどれか一つを正

解として成績を付けないといけないうてことか。ごくろうさんだなあ。

㊦ 曾鞏を見送った詩では、ほかにもいろいろな故事を用いていますが、いまの楽毅並みに解説して行くと大変なことになるので、ごく簡単な説明を適宜織り込んで訳す程度にしておきましょう。

冒頭に「すいおう酔翁」とあるのは欧陽脩の号で、そのことについては、たぶん次回にお話する機会があるのではないかと思えます。

酔翁の門下生はにぎやかにどっさりいて、
いずれ劣らぬ粒ぞろいであるから、
優れ者であるところから現れ出るのは難しい。

咲き乱れる多種多様な花の中で、

貴公ばかりはひとときわ高い香りを放ち、

南方から都に出て来るなり、

たちまち酔翁と並び立つまでになった。

その酔翁が今は地方の町に逼塞しているのだから、

貴公もやはりそうなるのが当然であるとして、

都を去ることになったのだろうか。

それとも、昔々皇帝に数々の提言をした賈誼かぎと同様に、

諸大臣に煙たがられて地方に追いやられるということなのだろうか。

楽毅は活躍し過ぎて亡命を余儀なくされたけれど、

晩年には故国との縁を回復させた。

だから、これから行く地の新鮮な魚の味にすっかり魅了されて、

もう都の生臭い肉などは食わない、などということには、

たぶんならないであろう。

とかく世間は口うるさく、

耳の中で蝉がわんわん鳴いているようなものだ。

できることなら、

都のあたりに巨大な池を造って、

大鯨のような貴公の大きな才能を、

自由自在に泳がせたいものだ。

——最後は、トバー君自身の思いがこめられているんだろうね。こまごまうる

さく言われずに、自分の思うままに力を発揮したいという願望だよね。

だけど、どれほど大きな池であっても、やっぱ鯨は海にいたほうがいいと思うなあ。動物園とか水族館に行くと、いつつもなんか悲哀を感じてしまう……ボクも現代社会という檻や水槽に飼われているだけなんだろうなあ……。

㊦ この時期、非改革派の友人、知人は続々と地方に出て行ったのですが、中には都に上って来て改革派として活躍する友人もいました。その一人が章惇しょうとんです。章惇の名は覚えていますか。

——えーと、もしかしてトラ退治をした人だったかな。そうだよね。そういう特定のエピソードと結び付いていると、少しは記憶に残るのかも。

㊦ 章惇は地方でのある事件を報告するために上京し、ある人の紹介で王安石と会いました。打てばたちまち響く章惇の才能のきらめきに、私たちがまち惚れ込んだように、王安石も「どうして君ともっと早く会わなかったのか、それが残念でならない」と、章惇を大いに気に入り、たちまち都で重く用いられるようになりました。

冒険好きの章惇の性格からして、改革の渦中に飛び込もうとするのはよく理解できました。己の出世ばかりを考えて王安石のもとに集まった連中とは異なり、章惇は改革を成し遂げるために全力を投じようと思いました。

章惇と政治的な立場は異なっても、友情は変わらないと私は思っていました。しかし、政治情勢に無頓着に振る舞えば章惇に迷惑がかかることを私は恐れまし

た。私は非改革派の論客として天下に隠れるところがなく、耳の中で蝉が鳴くくらしいに私を批判する声がわんわん響いていました。そのような私が会いでもしたら、章惇がどのような見られるかわかりません。章惇が都に来て2カ月余り後に私が都を去るまで、とうとう章惇と会うことはありませんでした。そして、その後、私と章惇は不幸にも、互いに不倶戴天の敵であると世間から見なされるようにまでなつて行つたのでした。

——ふーん。なかなか難しいものなんだね。お互いに自由な立場だったら親友のままではいられただろうにね。

① それでは、今夜の終わりは、いわゆる心温まる美談を一つ紹介してべとした

いと思いません。

話はまた文同に戻ります。文同が西方から都を目指していた旅の途中、ある町で宿を求めますと、一見して他の人と雰囲気が異なる風骨ある人士がいて、先方も同じように感じたのでしょうか、互いに会釈をし合い、言葉を交わすようになって、これからどこに行くのかと、お定まりの問いに、

「私はまことに不肖の息子、不幸な人間であります。幼いときに母と別れ、顔すら憶えておらず、以来間もなく50年となります。

昨年のことです。広徳こうとくの町においてお上の御用を務めておりましたとき、突然胸が激しく締め付けられ、いつか会えると思っていたけれど、その「いつか」というのは決して来ない、このままでは決して母に会えないと、居ても経つてもいられなくなり、すぐに役所に辞表を出し、『母に会うまで戻らない』と家族に言

置いてそのまま旅に出たのであります。以来、母を探して歩き回っております」

その人の名は朱寿昌しゅじゅしやうといい、父の朱巽しゅせんが官員として高い地位にあつた特典によつて、科擧によらずに官界に入った人でした。朱寿昌は父の正妻の子ではなく、父が長安にほど近い町に赴任していたときに、お妾さんとして家に置いていた劉りゆうという姓の女性が生んだ子でした。何かの事情があつて、劉氏が朱寿昌を身ごもつていた時期に、父は劉氏を残して別の任地に行つてしまいました。劉氏は朱寿昌を産むと間もなく、党とうという人と再婚し、赤ん坊は父の朱巽の元に引き取られました。朱寿昌は7歳のときに初めてこのような事情を知り、それが母についての全てでありました。

——美談といつてたから、『母をたずねて3000里』の中国版みたいな話なのか

な。『母をたずねて』は子どものころに絵本かなんかでは読んだ気がするけど、あれは子どもが主人公だったよね。中国ではおじさんの物語だったんだ。職を投げ捨てて旅に出たんだ……いまならネットで情報収集できるんだろうけど。

㊦ 朱寿昌が文同に言うには、

「父のかつての任地に行けば何かしらわかることがあるのではないかと、広徳から西に向かって潼関とうかんを越え、あちこちを尋ね歩きました。途中でお寺を見れば必ず参詣して仏様にお祈りし、背中を火で炙ると願いが叶うと聞けば試し、頭に炙をすえると願いが叶うと聞けば試し、自分の血で経を写して願を掛けるということもたしました。そうこうするうちにほんのわずかな消息が聞こえて参りまして、ようやく手がかりらしいものが得られ、もしかすると金州きんしゅうにいるやも知れぬとい

うことでありますので、いまそちらに向かつて急いでいるところなのです」

文同は、旅の費用の足しにでもなればと少々の支援をして別れまして、文同が都に着いたのが熙寧3（1070）年4月で、このことを私を始めいろいろな人語ったことで、朱寿昌のことが次第に世間に知れるようになりました。それこそネットがあれば朱寿昌がどういう人物であるのかすぐにわかるのでしようけれど、ある人が熱心に調べ、長らく地方官を務めたなかなかの人物であると知れ、朱寿昌の評判はますます高まったのでした。

一つだけエピソードを紹介しておきましょう。閩州ろうという町があつて、そこでようしりようは雍子良という土地の有力者が好き放題に振る舞っていました。雍子良のために財産を奪われた者は数知れず、命を奪われた者さえ幾人もいたという悪辣な人物で、その地に深く強固に人脈を張り巡らしていたために、歴代の州知事は全く手

を出せずにいました。

中国の昔の官僚は官員と吏人に分かれ、吏人は親代々その地で仕事をし、中央から派遣された官員は、吏人の助けを借りなければ何もできませんでした。閩州の吏人は皆で雍子良の不法行為を覆い隠し、その見返りとして多額の賄賂を得ていました。

朱寿昌が閩州知事として赴任すると、ある殺人事件が起こり、その犯人として一人の農民が逮捕されました。朱寿昌の取り調べに、その農民は素直に罪を認めたのですが、その様子にどこか不自然なところがあると感じたのでしよう、その者を獄に留めたまま別途調査をし、しばらくしてから農民を獄から呼び出し、

「そなたには子供がいるのか」

「へい、息子と娘が一人ずつおります」

「そなたが刑死したら、子供達が困るだろう。そういうことは考えなかったのか」

「へえ、一番気にかかることではございますが、幸いにも、娘と息子にはまことに結構なお約束がございまして、それがせめてもの救いでございます。この親爺めは安心して死んで行くことができるのでございます」

「ほう、それはどういふことかなのかい。よかつたら聞かせてくれないか」

「へえ、娘には嫁入り先が決まっておりますのでございます。それはそれは結構なお方のところでございます」

「そなたがこんなことになって、破談になったりしないのかい」

「へえ、そういう気遣いは決してないのでございます。そういうお話なのでございます。嫁入りのためにと、先方からはすでにたくさんのお金を頂戴しております。その上、息子はそのお方の一族の婿にしていただけるのでございます。かた

いかたいお約束なのでございます」

「なるほど、それは実に結構であるな。それでも、娘の嫁入りを実際に見ないうちに死んでしまうようなことになつては残念であろうな。そなたの犯した罪は免れないにしても、そのような事情があるのなら、せめて刑の執行だけは延ばしてやれるとよいであろうかな」

「いやいや、それは土台無理な話でございます」

農民はうなだれて涙を流し出しましたので、

「恩を着せるわけではないが、お上にも憐憫というものがある。私もこの町の知事として、そなたのためにできることがないわけではないのだぞ」

朱寿昌が様々に慰めの言葉をかけますと、

「まことにありがたい思し召しでございますが、あつしめが死にませんと、娘は

嫁に行けないのです。そういうお約束なのでございます」

「何やら奇妙なようであるが、どういうことなのかな」

「あつしめが死にます代わりに、嫁にしてくださいと、そういうことで全てのお約束を頂戴したのでございます」

「世の中には変わった約束があるものだな。それは口約束なのか、それともちゃんとした書き付けのようなものがあるのかな」

「ええ、れっきとしたお方が、書き付けも作ってお約束してくださいましたので、あつしも安心していられるのでございます」

「その書き付けはどこにあるのかい」

「大切なものでございますから家に置いてあります」

「嫁入りの金はもらっているのかい」

「へえ、若干の前払い金をいただいております」

「成程、確かな約束のようだな。それで、念のために聞くが、書き付けには、勿論役場の印が押してあるのだろうか」

「役場の印でございませうか。はて、それはどうだったでしょうか。そのお方が目の前で書いて、間違いのないものだとおっしゃって下さいました。大切にしまっておくようにと言われましたので、櫃の内に納めてございます」

「目の前で書いたというのであれば、役場の印はないということではないか。印がなければ、法的には無効であるぞ。そなたが死んだ後で、先方に知らん顔をされても、どうすることもできない。娘や息子はその書き付けを持って私のところに訴えて来ても、何もできないのだぞ」

朱寿昌がそのように言うと、農民は真っ青になり、だまされていたと知り、朱

寿昌に問われるままに、雍子良が犯した殺人の罪を自分が被ったということをお明かしたのです。

朱寿昌はすでにそのような裏のあることを知っていて、農民の証言を得て、直ちに雍子良を逮捕し、長年にわたって雍子良と組んで数々の罪を隠して来た吏人も処罰したのでした。

さて、話を戻しますと、朱寿昌が母親を探し歩いているということが都に知れて2カ月ほど経った6月のこと、長安から朝廷に一通の報告書が届き、朱寿昌が母親に会えたとわかりました。

皇帝は感動し、朱寿昌とその母を都に呼び寄せました。2人を宮中に招いて朱寿昌を褒め、本人の希望を入れて、母の郷里に近い町の知事に任命しました。

朱寿昌はしばらく都に滞在して、翌年の春に都を発ち、最初に会った文同を始

めとして大勢の人が送別の詩を作って贈りました。私も王安石もその中に加わりました。

実は、私が郷里に帰る旅の間に商行為に及んだと告発されたのは、朱寿昌が母とともに都に来る直前のことで、朱寿昌が都に経ったときにはその疑いがほぼ晴れていました。そして、思い出していただきたいのですが、司馬光が私を弁護して下さったときに、母の喪にあることを隠して官職に就いた李定こそがおぞましい人間であると皇帝に申し上げたのですが、そのときに朱寿昌は都に来ていたのです。

李定への批判も込めて、非改革派は挙って朱寿昌を称賛し、王安石もその中に加わらないわけには行かなくなつて、朱寿昌に詩を贈つたのでした。

——心温まる美談にも、政治の色が付いてまわったんだね。やっぱ『母をたずねて3000里』は主人公が少年だったから、純粹に感動できるってことなんだろうなあ。

㊦ 背景としてはいろいろとあったにしても、朱寿昌自身は高潔で、母を思う心は真に純粹でありました。

では私の詩を聞いていただきましょう。

ああ、貴公が母のことを初めて知ったのは七歳のときだった。

ああ、貴公の心の苦しみは成長するにつれて強まった。

ああ、貴公は老いに臨んでついに母と会うことができた。

喜びが極まり、涙が雨のように流れるばかりで、言葉は出なかった。

貴公は、宰相の地位に昇ることも羨ましいとは思わず、

貴公は、仙人になって天に昇ることに憧れもせず、

母の前で赤ん坊の服を着て、

赤ん坊の泣き声で甘えること宿願として、

五十歳にしてようやく成し遂げたのだった。

竜を煮て、宝玉を酒に変えて母のための祝いの膳とし、

千年万年の寿命を祈った。

皇帝は美々しい駕籠を使わして母を宮中に迎え、

金文字の詔書で貴公を官職に戻された。

貴公が母と別れ、そして再会した経緯を聞いて、

私は強く感じるものがあつた。

現代ではこのような事例を他に聞かないが、

昔にさかのぼればなかつたわけではない。

漢の武帝は、

母がかつて卑しい身分にあつたときに生み落とした姉がいると聞き、

自ら尋ね回つて姉を宮中に迎えた。

漢の大將軍の霍去病は、

夫なき母より生まれたのだが、

遠征の途上でついに父を見付け出した。

隋朝のある皇后は、

自分には親族が一人もないのを日頃から悲しみ、

ある農夫が「おいらの叔母は皇后様だ」と自慢していた聞くと、すでに死んでいたその男に高い位を贈った。

唐朝のある皇帝は、

自分の生母を知らないままに育ち、

戦乱で行方不明になったと後に聞くと、

四方に命じて捜したのだが、

ついに会うことはできなかった。

ところが、ある男は、

先々大臣になるまで帰らないと言って故郷を出ると、

母が亡くなったと聞いても、本当に帰らなかった。

とかく地位を優先する者が多い世の中であるから、

貴公を見て我が身を恥じる者が、
果たしてどれほどいるのだろうか。

——ははは、最後は李定先生へのあてこすりってことなんだね。

㊦ この詩もあつて、李定は敵愾心を燃やし、私を何としてでも罪に陥れようと思つたようです。口は災いのもとと言いますが、まさにそういうことです。

——それはそれとして、仕事優先、出世第一ではなくて、親孝行が優先するといふのは、介護離職とかが問題になっていることに対して、一つのブレーキ役になりうるように思うけど、昔のトバー君の時代のようにとにかく親孝行が最優先

で、それに縛られてしまうのも困るよね。仕事でも親孝行でも、たった一つの価値基準だけで物事を測るのがまずいんだろね。x軸、y軸、z軸……、もつといろいろな軸があつて、3次元、4次元、5次元空間のなかで自分の行動を選択できるようだといひんだろなあ。親孝行を話題にされると、ボクとしては……

* * *

イノ君の発言の途中で急に終わっているのは、イノ君が意図的にレコーダーのスイッチを切ったからだろう。その後で何を言ったのか、敢えて問うことはしていない。

今回の音声データを整理している間に、国会で先の国税庁長官の証人喚問が行われた。現政権に徹頭徹尾身を摺り寄せ、証言拒否を重ねて保身を図ったその姿

を見て、蘇東坡を告発した謝景温や李定はさぞやこのような人物であったのだろうと想像できる気がした。

蘇東坡の父が警告した、「自分達で評価基準を立て……根性曲りであることにかけては人から抜きん出ている……そのような者がいたなら、そのもたらす禍は一体どうなのだろうか」ということが、現代のこの国に当てはまらない保証は残念ながらないようである。